

刊行にあたって

広島大学マネジメント学会は、広島大学大学院社会科学研究科マネジメント専攻の所属教員と在学院生および修了生等によって、2000年に設立された学術団体である。この学会が刊行する学術雑誌が『広島大学マネジメント研究』である。

本誌はその第3号（2003年3月刊行）からレフリー制を採用している。具体的には、投稿論文等については、2名のレフリーが審査し、本誌編集委員会がその採否を決定している。2名のレフリーの審査結果が異なったときには、編集委員会において協議し、より厳しいレフリーの審査結果を採用している。その結果、この第19号においては、投稿件数3編に対して2編の掲載が採択され、それらはいずれも論文としての掲載が許可された。そのほかに本専攻教員による投稿論文2編も掲載している。

本誌は創刊以来、本専攻に所属する専任教員の1年間（暦年）の研究業績を掲載してきた。これは、われわれ国立大学教職員が税金と授業料収入などの財源によって雇用されている以上、研究業績の公表はもちろんのこと、その学歴や経歴をひろく社会に公表または開示することは、われわれの「雇い主」またはスポンサーに対する当然の義務とする考えからおこなっているものである。

本専攻に在学する院生のほとんどは社会人である。平日昼間は会社や役所などで勤務し、夜間や土曜日に講義やゼミを受け、深夜や日祭日を中心に論文や研究ノート等を書き上げた院生諸子に対して敬意を表するものである。本誌においては、本年3月をもって修了が認められた院生諸子の修士論文と課題研究の要旨をひとりあたり1頁で掲載している。博士論文要旨については、ひとりあたり2頁で掲載されている。ただし掲載されている論文要旨は、本専攻の修了生であり、かつマネジメント学会の会員にかざられる。

現在、日本の国立大学法人における社会科学領域は、極端に表現すれば「存亡の危機」に瀕している。それは、おもに理系発想の評価指標のみによる研究業績評価に起因している。研究テーマや研究アプローチの多様性を是認せず、また新たな研究分野を開拓する意欲や意識が欠落した者が多いように感じる。

大隅良典さん（東京工業大学）によるつぎの発言（インタビュー）を引用しておく。

「自分が何をやりたいか一生懸命考え、恐れずにやってみることだ。日本人にとって他人と違うことに挑戦することは怖い。ただ欧米は他と同じことやっていると埋もれてしまうという強迫観念があり、個性を示さないと生き残れない社会で競争している。業績づくりよりも自分のやりたいことが先にないと面白い研究はできない」

「視野の狭い研究者ほど客観指標に依存する。日本の研究者は日々忙しく異分野の論文を読み込む余裕を失っている面もある。だが異分野の研究を評価する能力が低くは、他の研究を追い掛けることはできて、新しい分野を拓いていけるだろうか。研究者は科学全体を見渡す能力を培わないとダメになる」

（出典）『日刊工業新聞』2017年12月27日。そのインタビュー記事の表記の一部を変更したものが同年12月29日付けの日刊工業新聞ウェブサイト（ニュースイッチ）に掲載されている。上記の引用はウェブサイトからのものである。

本年度末をもって、本専攻、本研究科を退職（転出）される教員がふたりいる。それは、椿 康和一さん（マルチメディア基礎論）と原口恭彦さん（人的資源管理論）である。本来であれば、退職記念号を刊行することになるが、おふたりともに、おそらくは謙虚さからご自身の退職記念号の刊行を辞退されている。そこで本号はおふたりの退職記念号としては刊行していない。

ともに長年にわたり本専攻と本研究科における教育と研究に対して貢献をしてくださり、かつおふたりとも学内外における行政的職務や社会貢献にも尽力されてきた。ここに、おふたりに対して、相応の敬意と感謝をしつつ、今後も心身の健康に留意され、今後の平穏な教育研究生活または引退生活をおくられる

ことを祈念する次第である。

最後になったが、レフリーを引き受けてくださったかたがたには感謝する次第である。また執筆者や印刷会社との連絡調整（交渉と催促）を担当してくださった鬼頭智子さん（マネジメント専攻長室勤務）に対しても謝意を表す。

2018年3月

星 野 一 郎

(広島大学マネジメント学会会長)